

諦観と晩年性

——生涯発達心理学の新しい概念として

鈴木 忠
飯牟礼 悦子

第1節 新しい概念の必要性

【1】 発達と加齢の不均質性

1980年代に生涯発達心理学が発達の新しいアプローチとして誕生した際、個人差の捉え方に関して、発達の不均質性 (heterogeneity) が強調された (e.g., Maddox, 1987)。それまで考えられていた個人差は、典型的には正規分布をモデルとする量的な差異であった。しかし発達・加齢の個人間の差異はむしろ質的に異なるのであり、不均質性という概念によって、より適切に捉えられるのではないか。たとえば中高年の生理学的機能は、もって生まれた体質にも影響されるが、食事や睡眠の習慣、節制や運動をどのように心がけているかといったことによって大きく左右される。重要なのは、それらが私たち自身によってコントロールできるという点である。つまり発達・加齢とはそもそもそのような余地を各個体のいわば裁量に委ねているのであり、個人間の違いは量的な差異としてよりも、発達主体の制御 (regulation) の結果としての不均質なものとして捉える方が、実際の姿に迫れると考えられるようになった。

従来、発達は遺伝と環境という、発達主体にとって外的ないしコントロールできない要因を軸に探求されてきたが (「歳をとるとどうなるか」という問い)、生涯発達心理学は、それらを基本的な制約とみなしつつ、主体自身が自らの発達をどのように方向づけるかが発達・加齢のしかたを大き

く左右するという考え方（「どう歳をとるか」という問い）への転換を促したのである。そのことは、生涯発達を、主体の選択・制御による変化の積み重ねとしての、個別化（個性化）のプロセスとして捉えることを意味する。歳をとるほど各個人は、独自性の強い存在になるのである。

【2】 サクセスフルエイジング

歳のとり方を自ら選択・制御するということは、適切な選択をすれば「じょうずに（サクセスフルに）」歳をとれることを意味する。「どう歳をとるか」という問いとのセットとして、サクセスフルエイジング (successful aging) が生涯発達心理学のキー概念となった。生涯発達は自分でコントロールする余地（可塑性）がたねにあるのだとすれば、私たちはさまざまな工夫をして「じょうずに」歳をとろうとしているはずだと仮定するのである。

じょうずに歳をとるための工夫として、P. B. バルテスは、選択 (selection)、最適化 (optimization)、補償 (compensation) という3つを挙げている (e.g., Freund & Baltes, 2002)。減少するリソース（体力や記憶力など）を投下する分野を選択し、そこでのパフォーマンスを最大にすることを目指し、場合によっては今までと違うやり方で補償するということである (SOC 理論)。これらは一般性の高い方略だが、本稿の第2節では、SOC の一つの形として諦観という概念を提案したい。

さらに、じょうずに歳をとることのゴールとはそもそもどういうことだろうか。大きく捉えるならば、E. H. エリクソン以来、自分の生きてきた人生を総括し意味づけることを通して、老いを迎える自己のアイデンティティを再統合することが、老年期の重要なゴールだと発達心理学は考えてきた。それによって老年期の「満足感」や「幸福観」がもたらされると想定してきたわけである。

そのようなことは確かに望ましい発達・加齢の方向であろうが、それが唯一のものというわけではないだろう。発達の不均質性に照らせば、むしろ従来のサクセスフルエイジングを「サクセス」とする発達モデルを相対化する観点が検討されてよい。本稿の第3節では、芸術家の晩年の作品について論じた E. W. サイドの論考に拠りながら、これまで発達研究では全く取り上げられてこなかった晩年性という概念に注目する。(なお本論文は第1節と第3節を鈴木が、第2節を飯牟礼が担当、執筆した。)

第2節 諦観——「明らかに観る」ことからの発達

【1】なぜ「諦観」なのか

「確かに病気になったことは嫌だけど…。一生治らない病気になったことはいやだけど、しょうがないから。諦めなきゃって気持ちがあったけど、その頃は絶対諦めがつかなかったし、治ると思ってたし…。なんで私がって、他にも誰か居るじゃんって、(病気に)なるような要因の人がっていう気持ちでいたから。でも今は、なってよかったとは絶対に思わないけども、まあ、しょうがないっていう。ちょっと、長期の一生の風邪にかかったくらい。」(飯牟礼, 2007)

これは、1型糖尿病という慢性疾患を20代のときに発症した女性のことばである。この病気は、一般に成人病として知られる2型糖尿病とは異なり、その発症原因は不明かつ比較的若年で急激に発症するという特徴をもっている。したがってこの女性のように、人生の中で肉体的にも精神的にも、最も充実し輝くであろう時期に、原因不明の、しかも一生治ることのない病いを抱えることは、確かに「嫌な」ことであるといえよう。しかしながら、この女性は病気になったことを「しょうがない」と語り、「ちょっと長期の一生の風邪にかかったくらい」のこととして、捉えようとしている。

このように病気であることを「諦める」姿勢は、一般に「闘病」「病気

に負けないように頑張る」といったことばで表わされるような病いを「敵」と捉え、対峙するような関係の持ち方とは、一線を画すものである。上記の例は、いわば「病気であること」に対して「諦めている」状態であるといえるが、慢性疾患をもつ人の語りには、さまざまな事象に対する「諦め」がみられる。たとえば、自己に関することでいえば、「体力の限界があるので、無理しない」といった自らの身体能力に対する「諦め」は、慢性疾患をはじめとした病いを抱える人々には比較的多くみられるだろう。また、慢性疾患をもつ人々の語りには、他者との関係性の中で「他者は他者、自分は自分」といった割り切りを示すいわば「社会的な関係性」に対する「諦め」や、「会社（仕事、一般社会）は、こういうものだから仕方がない」といった「社会そのもの」に対する「諦め」を示す発言も見られる。

このような、慢性疾患をもつ人々にみられる多様な「諦める」という態度には、一見「後ろ向き」な態度として捉えられるが、その語りからは「病気」という非常につらく苦しい出来事のもつマイナスの側面を「諦める」ことによって極小化している可能性がうかがえる。また、このような病気をはじめとした大きな喪失は幾重にも重なり合い、複雑にその時々の発達のプロセスに絡み合い、人生行路の変更（あるいは軌道修正）を余儀なくする。一般に、その行路変更は容易ではなく、多くの喪失経験者は、受け容れがたい喪失と日々対峙している。このような一生涯続く喪失と「上手に」付き合うために必要な方略のひとつとして、「諦めること」すなわち「諦観する」という方略の有効性を検討する意義があるだろう。

以上のことから、本節では生涯発達において大きな人生上の変化をもたらすであろう何らかの喪失経験を契機に見られる発達の一側面として、「諦観」という方略に注目することにした。

【2】「諦観」とは何か

私たち人間は、常に何らかの目標を求め続けている存在であるといえる。たとえば乳児の頃には、手の届かない所に置いてあるおもちゃに必死に手を伸ばしたり、母親の注意をひくなどして、おもちゃを獲得しようとする。また、オリンピック選手は体力の限界まで鍛練を重ねた上で、輝かしい記録を残したりもする。しかしながら、そのような栄光と獲得の喜びの陰で、「無理だから諦める」ことが同時に行われているのも事実であろう。オリンピックに出場するような運動選手の例でいえば、大きな怪我をすればオリンピックへの出場や選手生命そのものを諦めて、コーチや監督といった指導者の側にあたな道を見出すこともあるだろうし、「スーパーで特売のお肉が売り切れだったから、諦めて今日の夕飯のおかずは魚にする」といった日常生活の瑣末なことまで、自らの能力の限界や如何ともしがたい状況を鑑みて、何かを「諦める」ことは日々行われている。

では、そもそも「諦観」という概念は、一般にどのようなものとして捉えられているのだろうか。次項では、心理学における研究動向を踏まえながら、「辞書的な定義」と「仏教用語としての定義」を例にあげ検討していく。

【2】- 1 心理学における「諦観」—— 消極的な意味づけ

まず、心理学において「諦観」とはどのように概念化されてきたのだろうか。「諦観」という概念は、心理学においては「諦める」ということばのもつ一般的な意味合いから、ネガティブな状態像を示したり、消極的なコーピングの一種として位置づけられる傾向がみられる（浅野・小玉，2008）。たとえば、前者の例としては「どうせ何をやっても無駄だからやらない」といった「学習性無力感」（Seligman & Maier, 1967）があげられる。また、後者に関していえば、欧米のストレス・コーピン

グに関する研究 (e.g., Feifel & Stack, 1989) においては、“resignation” というコーピング方略は、「抵抗することをやめたり、ストレスフルな状況を無理に変えることなしに受け容れる」こととして、問題状況が統制不可能な状態であることを示している。また、「受け容れる」姿勢は見られるものの、その後の発達変化を自ら制御するような積極的姿勢はあまりみられない。さらに、本邦においても数多くのコーピングスケールを集約した神村ら (1995) が開発した「三次元コーピングスケール (TAC-24)」の、「放棄・諦め」といった象限は「自分では手におえないと考え、放棄した」「どうすることもできないと、解決をあと延ばしにした」「対処できない問題だと考え、諦めた」の3つの項目で構成されている。これらの項目は「回避型問題対処」として、消極的な意味合いをもつものとして分類されている。

以上のように、心理学における「諦観 (あるいは諦め)」という概念は、状況に対する対処を放棄したり、状況そのものを漫然と受け容れるといった消極的なニュアンスをもつものとして捉えられていることがわかる。

【2】- 2 辞書的な定義

一般的に、われわれは「諦観」ということばを日常生活の中で耳にすることは少ないが、「諦める」ということばとほぼ同意義で理解されている傾向がある。ここでは、概念化を行うにあたり、「諦観」ということばのもつ基本的な意味を、辞書的な定義という点から明らかにしていく。

表1のとおり「諦観」の一般的なイメージである「諦める」という消極的な語義は、むしろニュアンスとしては弱く、入念に物事を観察したり、「見通す」「見極める」といった「物事を明らかにする」という語義

が第一義的にあることがわかる。これは、「諦」という漢字が元来、「真理・真実」という意味を持つことに由来する。

さらに「諦観」ということばには、「悟る」という意味が含まれていることから、諦めた後の新たな心理的な変化を示しており、単純に「諦めて何もしない（しなくなる）」という消極的な態度ではないことを含意していると考えられる。

つまり、辞書的には「諦観」とは、「諦め」という意味以上のものを含むより積極的な概念であると考えられるであろう。

表1 諦観の辞書的定義

辞書名	定義
広辞苑 (第6版)	【1】 入念にみること。諦視
	【2】 明らかに真理を観察すること (仏教用語)
	【3】 あきらめること
大辞林 (第2版)	【1】 全体を見通して、事の本質を見きわめること。
	【2】 悟りあきらめること。超然とした態度をとること。
大辞泉 (増補・新装版)	【1】 本質をはっきりと見きわめること。諦視。
	【2】 あきらめ、悟って超然とすること。

【2】-3 仏教用語としての「諦観」

上記のように、辞書的な「諦観」の定義のうち、第一義として浮かび上がった「明らかに観る」という意味は、広辞苑第6版(2008)で示されている仏教用語でいう「諦観(たいかん)」に該当する。すなわち、「明らかに真理を観る、つまびらかにする」といった意味をもつことばである。

仏教における根本的に共通する人生観、問題意識として「人生は苦である」(城福, 2002)という考え方があり、仏教では、人が苦しむのは、人間の「煩惱」や「執着」のためとされている。この「苦」を取り除いて「涅槃」へ行く、つまり苦を解決し、苦を無くした理想世界に到達することがその目的とされている。しかしながら、現実的には「苦」がなくなることはないので、「諦観」に示されるような「諦め」「真理を見つ

める」しかないという状態になるのだろう。先にも述べたように、仏教用語でいう諦めは、「諦」という漢字のもつ「真理・真実」という語義が強い。しかし、比較的近年になって「諦める」ということばがいつしか、「断念」や「放棄」といった消極的な意味合いに転じてしまった（三枝，1990）ようである。なぜこのような意味の転化が起こったのかについては、明らかにされていないものの、少なくとも仏教においては、消極的というよりはむしろ仏教の最終目標である「涅槃」に到達するために必要な積極的な意味合いをもつ用語として用いられているようである。

この仏教でいう「明らかにする」といった視点は、仏教の教えの集約である「四諦（したい）」において如実に示されている。「四諦」とは、「苦諦（くたい）」「集諦（じったい）」「滅諦（めったい）」「道諦（どうたい）」の4つをいい、悟りを開くために必要な一連のプロセスとして位置付けられている。「四諦」でいう「諦」とは、梵語でいうサトヤ（satya）の訳語で、「真理」という意味をもち、どちらかといえば理論的というよりも実践的な真理を指し、その方面で永遠に変わらない真実、道理という意味をもつ（城福，2002）。仏教では、まず「苦諦」という「人生は苦であるという真理を現実として認識する」ことから始まり、人生に苦をもたらす原因が人間の「煩惱」であることを明らかにしていくことを「集諦」とした。さらにこの苦を解決し、消滅した理想世界、つまり「涅槃」に至ることを「滅諦」とし、悟りを開くために、実践的には具体的にどのようなことをすればよいのかを説いた「八正道」の教えに従って正しく修行することを「道諦」とした。

この「四諦」の教えの中では、我々が悩み苦しむ原因を「明らかに」し、それを無くすために何が必要かを「明らかに」している。すなわち仏教では、物事に執着することが苦悩の起こる大きな原因である（城福，

2002) ために、「諦観」という態度が自ずと必要になってくる。「諦観」のように、自分が置かれた状況や物事があるがままによく「観て」、執着せずに生きる態度は、慢性疾患や身体的な障害のように長期的な喪失を抱える際、有効な対処方略となりうるかもしれない。

このような仏教的な考えに基づいた「諦観」は、僧侶でもあった吉田兼好の作品である「徒然草」などに代表される古典文学にも「無常観」という形で見受けられる。仏教的な考え方が日常に根づいた日本文化では、「諦観する」という認知的な対処のあり方は比較的受け容れられやすい概念であるといえよう。

【2】- 4 心理学における近年の研究動向 —— 「諦観」の積極的意味づけ

先に述べたように、心理学においては「諦観」を消極的な対処方略の一つとして位置づけてきた経緯があるが、ごく最近になって「諦める」ことの積極的側面に注目した研究が散見されるようになってきた。浅野・小玉(2007; 2008)は、「諦め」を「わりきり志向」ということばを用いて、「個人が葛藤状態にある際に目標レベルでの諦め(諦めようという意図や動機)を有する個人傾向」と操作的に定義した。彼らによると、「わりきり志向」は、「わりきりの有効性認知」と「対処の限界性認知」の2次元で構成されており、前者は、新たな目標への関与を促すことで「人生に対する満足感」や「自尊感情の維持」といった精神的健康度につながり、後者については、達成不可能な目標への非関与を促し、新たな目標設定を促すことにおいて重要な役割を果たす可能性が示唆されている。

従来の心理学研究においては、「諦めた」後のプロセスを考慮せず、現在の葛藤状況そのものを変化させるような積極的取組をしないものとされている。しかしながら、浅野らの研究では、「諦める」ことが新たな

な目標設定を促したり、達成困難な目標に対して固執しないことによって、精神的健康に肯定的な影響を与える可能性を示唆していることから、喪失経験後の発達プロセスを長期的に捉える上で、重要な示唆をもたらす可能性があるだろう。

現状として、このような「諦める」ということのもつ、積極的な意味合いを意識的に認知し、その有効性を検証する研究は、本邦においては発展途上の段階であり、今後データの蓄積が必要となるといえよう。

【3】「諦観」の概念化に向けて —— 生涯発達の視点から

以上のように、「諦観」という概念は、従来捉えられてきたような「諦める」＝「何もしない（しなくなる）」といった消極的な姿勢で説明するには不十分であり、さまざまな人生経験を重ねた成人期以降の認知発達を捉える上で、重要な視点となる可能性が示唆される。

特に、「諦観」という概念の中で、非常に重要であると思われる含意として、「固執しない」という点があげられる。たとえば、慢性疾患のような生涯治らない病気を「治す」ための方法を探したり、病気を無くすことに固執し続けることは、心身ともに多大な労力を費やすことになり、個人のもつ病気以外の潜在的な能力や可能性に目を閉ざすことにもなりかねない。現実的には、日々の社会生活で取り組むべき問題は数多くあるため、一旦「諦観」することを通して、現実的な問題に取り組む道筋を示唆する必要もあるだろう。

さらに、「諦観」を日常的な対処スタイルとすることは、ただ「諦める」のではなく、その後の身の処し方に大きな影響を与えることがある。たとえば、飯牟礼（2007）では、慢性疾患をもつ人は、仕事に励む友人に対して、決して「仕事頑張ってね」という「頑張り」を強要するような励まし方ではなく、「なるべく仕事無理しないでね」といった相手への気遣いを

示したり、励ましを心がけるようになったことが報告されている。これは、慢性疾患という経験を通して獲得した「無理をしない生き方」を「他者への配慮」として発揮しているといえよう。このような、喪失経験後に見られる他者への配慮や広い意味での人格的発達の前条件（必須条件であるとはいえない）として、「諦観」することが大きな意味をもつと考えられる。「あるがままを見つめ、無理をしないで生きる」ということは、現実社会においては困難を伴うことかもしれないが、「諦観」することの重要性和有効性を検証することによって、日常生活にともなうさまざまな心理的負担軽減の一助となりうるであろう。

以上のことから、本論で提唱した「諦観」とは、生涯発達心理学的観点にたてば、物事や現状のあるがままの姿を冷静に見極めることを通して、その後の発達変化を決定づける発達の認知的制御のスタイルのひとつとして位置づけられる。生涯発達心理学的な観点からいえば、従来、成人期以降の知的発達は20歳頃をピークとし、それ以降しばらくの間同じくらいの水準を保つものの、その後ゆるやかに下降していくものとされてきた（柏木，2005）。確かに、身体能力の低下や病気の罹りやすさといった身体的な「老化」の影響を考えると、このような「古典的加齢曲線」にしたがったイメージがあることは否めない。しかしながら、「標準的な」加齢パターンを批判的に検討することから始まった生涯発達心理学において、「縦断的方法」や「コホート系列法」、「訓練研究」といった研究方法の改善等により、発達の道筋は一枚岩ではなく、その多様性や可塑性が示唆されるようになってきた（鈴木，2008）。特に、知的発達においては、「結晶性知能」に代表されるようなことばの知識や運用能力、経験を通じて獲得された一般的な知識という形で示される知能や、多様な人生経験を通じた「熟達化（expertise）」や「英知（wisdom）」の獲得など、年を重ねるからこそ発達していく側面があると考えられている。さらに、生涯発達心理学における

新しい発達観である「サクセスフルエイジング」の考え方に沿っていえば、人間は、加齢による変化を見越して自分の発達の仕方や発達環境を制御していく（鈴木，2008）存在であるといえる。そのような資源の使い方を論じたバルテスらによる「SOC理論」（Freund & Baltes, 2002）に従えば、一見、主体が自らの生き方や能力を制御することを諦めた「消極的な」状態であるように見える「諦観」は、慢性疾患のような一生涯治ることのない病いを始めとした大きな喪失を抱えたときに、その喪失や喪失に関わる事象を一旦「諦める」ことを「選択」し、自らの発達の方向性を積極的に「制御」するための方略として捉えることができよう。

つまり、「諦観」とは「喪失」をはじめとした予定された発達のプロセスを大きく変化させる出来事が生じたときに、自ら立ち止まり何らかの軌道修正を行なう（あるいは、新しい道筋を作り出す）ための方略のひとつであり、従来の心理学でいわれてきた消極的な意味合いよりむしろ、積極的な意味を有するものであるといえよう。

今後、特に大きな人生における心理的発達変化をもたらすであろう、「喪失経験」に注目することによって、それらを経験した人々に見られる具体的な「諦観」のスタイルを探求し、「諦観」と関連する諸概念との比較を通して、概念の精緻化を図りたいと考えている。このようにあらたな発達の認知的制御のスタイルを提示することによって、「頑張る」ことに重きを置かれがちな競争社会において、「無理をせず、現実をあるがままに見つめる」ことから始める生き方の重要性が示唆できるのではないだろうか。

第3節 「晩年のスタイル」と生涯発達

本節は、T. W. アドルノと E. W. サイドによる「晩年性（lateness）」ないし「晩年のスタイル（late style）」の議論を、生涯発達心理学の立場

からレポートすることに主眼をおく。最後の部分で、晩年性が生涯発達心理学に対してもつ意味を簡単に論じたい。なお以後の記述では、引用符は「 」と〈 〉の2種類を使用する。前者はアドルノとサイドの著書（アドルノ，1997；サイド，1993，2007）の中から文字どおり引用していることを示す。後者はそれ以外の場合——本稿の議論の筋をその語によって強調する際などに用いる。

【1】「晩年性」「晩年のスタイル」とは何か

「晩年性」は、芸術家とその作品について、アドルノが最初に用い、それを受けてサイドが展開した概念である。

晩年性は、サイドが強調しているように、一生の中で「遅い時期である」ということに加えて、「時期を逸している」という点に重点がある。つまり晩年のスタイルは、社会的に容認されている価値観や思考の枠組みに「妥協」し調和することを拒否することと結び付いた表現様式である。

それは作品のどのような特徴だろうか。サイドが使っている表現でいえば、晩年のスタイルは「頑迷固陋」で「気難しげ」、「非妥協的」で、「非人間的ですらある挑戦的姿勢」が見いだせるという。よく言われる成熟や円熟、あるいは「晴朗さ」とは対極のものである。鑑賞者が思わず引いてしまうような独特の力をもったものことである。

晩年になる前、壮年期の作品との違いをあえて図式的に対照させるとすると、前者のいわゆる脂ののった時期の作品は、細部がテーマとつながり全体が緊密に統合されているのに対して、晩年の作品では、往々にして細部は単なる「断片」であり、全体に散漫で緩く、いわば余白が多い感じがする。完結性が弱く、鑑賞者に〈どうしてここで終わるの？〉といった戸惑いや消化不良の感をおこさせたり、〈見ていてつらい〉感じを催させる。

上に述べたように、晩年のスタイルは、芸術家が鑑賞者と共有している

作品の構成や進行のイメージ、解釈枠組みに背を向けたものである。芸術家自身のそれまでの作品の特徴（彼の芸術家としての評価を確立したものを自ら否定するとともに、彼自身もその一翼を担ってきた既存の価値観や表現形式に対しても自らをずらしてしまう。そのような特徴をサイドは「エグザイル (exile) の形式」と呼ぶ。エグザイルとは亡命者、故国喪失者であり、安住の地をもたず、そこに暮らしてはいても安らげない。より一般的な言い方をするなら、「現在の中に存在しながら…現在から離れている」（サイド、2007、p.151）存在である。晩年性とは、そのような存在に自らを「追放」すること——すなわち自分が築き上げ社会的に認められたスタイルを否定し、時流や主流の考え方に背を向けることである。それは、自らのアイデンティティを危機にさらすことに通じるから、きわめて危ない橋を渡ることであり、「カタストロフィ的」である。しかしエグザイルであるがゆえの力——創造性を有し、後の世代に影響を及ぼす可能性をもつ。

【2】 アドルノの論考——晩年のスタイルのもつ断片性

「晩年のスタイル」は、アドルノがベートーベンの晩年の曲を分析した際に用いた Spätstil (late style) ということばに由来する。「近代文化の歴史の中での一大事件」（サイド、2007、p.29）であるベートーベンの後期に属する作品（「荘厳ミサ曲」など）を詳細に分析したアドルノの論考を受けて、サイドは晩年性についての議論を展開した。

鑑賞者にとって近よりがたい「カタストロフィ的」ともいえる作品を、アドルノはどのように論じたのだろうか。「荘厳ミサ曲」に関する論考（アドルノ、1997）をもとに簡単に見てみよう。

「荘厳ミサ曲」は、ベートーベンのそれまでの作品と異なり、難解で「呪文的」である。高い評価が定まってはいるものの、どこがほんとうに

すぐれているのかを正面切って分析した者はほとんどない。批評家ですらしり込みしてしまうような曲なのである。

それまでのベートーベンときわめて異質で「呪文的」な特徴はどこからくるのだろうか。「荘厳ミサ曲」とその後の四重奏曲においては、共通して、彼の中期の作品を特徴づける古典主義音楽としての特徴——細部すべての運動からつくられる全体性——が意図的に回避されている。曲の中の対立的な自己運動が、弁証法的なコントラストとならず単なる対立で終始し、細部は断片のままである。曲は表面的には展開していくものの、展開の原理が意図的に排除されているために、曲を聴く者は曲の全体的イメージをつかめず、中途半端な感情を喚起されてしまう。

「荘厳ミサ曲」は、そのタイトルからわかるように、「アルカイック」な形式を採用している。従来の説明では、ベートーベンが彼本来の資質に合わない形式を選択してしまった結果だとされてきたが、ベートーベンはあるてこの形式を選択し、彼としては異例なほど時間をかけて作曲した。「主観的な意図を貫徹するためでなく、意図を排除するために」労力が払われているのである。彼はそれまで自分や同時代（古典主義）の作曲家が心がけてきた、曲全体に統一感を与えようとする操作を作為的で一種の「虚偽性」を帯びていると感じとった。その結果として出てくるのが断片化へと向かう表現形式なのである。それによって、最後期のベートーベンの作品にあっては、「個人的表現を一切含まない剥き出しの音楽言語」が実現された。音楽言語が、表現しようとしたものを伝える媒体としてではなく、それそのものとして「露出」している。曲は「無機的」であり「自動的運動のイメージ」となっている。それは結果として現代の前衛音楽の先駆けともいえる新しい表現形式を示唆するものとなった。

【3】「エグザイルの形式」としての晩年のスタイル

おもに音楽作品を批評の対象としたアドルノにおいては、「断片性」が晩年のスタイルを特徴づけるキーワードであったが、サイドは音楽以外の芸術作品やパフォーマンスにも晩年性の概念を適用した。その特徴は、既存の支配的な枠組みに「回収」されることを拒否すること——「現在の中にいながら現在から離れている」こと——すなわちエグザイルの形式であった。ベートーベンの晩年のスタイルをサイド流に言うなら、たとえば「ベートーベンの晩年の作品群は、高次の統合によって和解へと到達したり懐柔されることはない。それらはいかなる枠組みにも合致しない」（サイド、2007、p.36）といった表現になる[注]。ここでは、サイドの著書『晩年のスタイル』（サイド、2007）をもとに、彼が考える晩年性の特徴をまとめてみよう。

【3】-1 〈選択の所産〉としての晩年のスタイル

上のアドルノの分析でも指摘されているように、晩年のスタイルとは、芸術家が積極的に選び出しつくりだすものであり、単純に老化や力の衰えが露わになった状態を指すのではない。それらは晩年性の特徴をつくりだす原因のひとつであるにしても、その反映ないし結果が即、晩年のスタイルなのではない。つまり当人またはその作品は〈枯れて〉いるわけでは全くなく、むしろ「非妥協的」で「頑迷固陋」な境地の横溢した「厄介」な存在なのである。

サイドはリヒャルト・シュトラウスについて論じた章の中で、シュトラウスが力の衰えを感じ「とるべき選択肢は多くない」と認識した状態で「唯一適切な選択肢」を選んだと書いている。ちょうどベートーベンが「アルカイック」な形式をあえて採用したように、シュトラウスはフランス革命以前の「圧倒的な裕福さと特権的豪華さ」を題材に選んだ。

「十九世紀後期の、本質的にロマン派の作曲家が、自分の時代が終わってから久しいのに、生き延び作曲しているだけでなく、頑迷固陋ぶりを發揮して十八世紀にまで時間をさかのぼることで、すでに時代と同調しなくなっている作風がいよいよ時代から遊離したものとなる。そしてこうした退行的な流儀で、確信にみち流麗ですらある音楽をつぎつぎへと紡ぎ出す、その卓越した専門技能ゆえに、シュトラウスはどうしてもなくやっかいなのである」(同書, p.82)。

〈選択の所産〉として晩年性を見る視点は、『晩年のスタイル』の多くの章に見出せる。すなわち二つの異なる個性や文化(時代や地域)の交わりにおいて現象したものとして晩年性が論じられている。

第1章ではアドルノ自身の晩年性がベートーベンとセットで論じられる。哲学者、批評家としてのアドルノ自身、「自らの手で自分を細かなパーツに分解しないと気がすまない暴走機械」であり、彼の文章自体も「内的運動は意図的に錯綜」し「破綻」しているとされる。リヒャルト・シュトラウスと18世紀の「呪縛」(第2章)、ジャン・ジュネとパレスチナ(第4章)、イタリアの小説家ランペドゥーサと、その作品「山猫」を映画化したルキノ・ビスコンティ(第5章)、グレン・ゲールドと、彼が好んで演奏したバッハ(第6章)、詩人カヴァフィスとエジプトのアレキサンドリア(第7章)、それに「ヴェニスに死す」を戯曲化したブリテンと原作者トーマス・マン(同章)といったぐあいである。一方に晩年性の資質が認められるとしても、それを触発し発現させるもう片方にも晩年性の性質が見出されている。一方が他方を、ほかでもないそれとして選択した結果として晩年のスタイルが生じているのである。

晩年に独特のスタイルをどう理解したらよいかに関して、サイドは「迫り来る死への意識を重視する…解釈に還元すること」に反対する。彼によれば、死は屈折した「アレゴリー」として——「芸術家が作品そ

のものに別れを告げるときのいらだたしい身振り」として芸術の中に表れる。つまり芸術家は「近づきつつある死」そのものをモチーフとして作品を作り出すわけではなく、晩年の選択のプロセスを経て作り出される作品の独特のスタイルに、鑑賞者の方で「死の影」を感じ取ってしまうのである。

晩年に独特のスタイルが生まれる契機とはどのようなものであろうか。発達心理学のことばでいえば、〈人生の残り時間が有限であることの自覚〉(e.g., Carstensen, Isaacowitz, & Charles, 1999)であらう。体力や気力の衰え、記憶力の低下を実感し、それらのリソースをどの方面へどのような形で投資するかを、ある年齢になると私たちは選択する(前述のSOC)。その結果生じる芸術上のスタイルが晩年のスタイルだと考えられる。

繰り返すと、晩年性は老化によって自然に生じるものではない。選択の所産としての晩年のスタイルの中には「内的緊張」があるとサイドは言う。「隔離性や追放状態や時代錯誤の感覚を高めること」こそ、「晩年のスタイルが自らを維持するために…使用するものである」(サイド, 2007, p.42)。それは「どこにも回収されない」「別の選択肢」を示すことに通じる。したがって晩年のスタイルのもつ手強いとつきにくさは、一面では「どこにも回収されない」ゆえのラディカルな創造性をしばしばともなう。別の言い方をすれば、自らがいる場所で安らぐことのできない「エグザイル」は、周囲の支配的価値観や思考方法を相対化し、深い独創性を示す可能性をもつ。「現在の中にいるが現在から離れている」存在は、「現在」の中にはまりこんで暮らしている人たちが自明の前提、拠り所にしてしている考え方や価値観を対象化する契機をもつのである。

【3】-2 アイデンティティーの問題——ジャン・ジュネ

自らをエグザイルの状態に「追放」することは創造性を獲得する可能性をもつ一方で、アイデンティティーを危機にさらすことにつながる。自分自身を確認したり社会から承認されたりするための参照枠組みそのものを否定してしまうからである。

サイードの晩年性の議論は、「エグザイル」をキーワードにするがゆえに、すぐれてアイデンティティーについての議論であり、しばしばそれが批判的に言及される。たとえばアドルノのベーターベン論をめぐる第1章では、「統一性に特別のアイデンティティーをあたえてしまうことは、作品のカタストロフィとしての力を殺ぐことになる」（同書、p.35）と述べられている。うまくまとまる（まとめる）ことによってカタストロフィを免れ、安定性と理解のされやすさを得る一方で、創造性につながる「力」を失うことになるのである。

ジャン・ジュネについて書かれた第4章では、より本格的にアイデンティティーについての議論が展開される。

「この戯曲『屏風』…の偉大さとは、…アイデンティティーという概念そのものを、慎重かつ論理的に解体することにある」（同書、p.136）とあるが、それは具体的にどのようなことか。ジュネの晩年の戯曲である「屏風」への批評から簡単に見てみよう。

「屏風」は、ジュネの他のいくつかの作品と同様、明確にアルジェリアやパレスチナのフランスへの抵抗運動への支援として書かれている。しかしジュネは、アルジェリアを支配し抑圧しようとするフランスを批判する一方で、それに反抗するアルジェリア人の反応もまた、「アルジェリアをアルジェリア人という単細胞的大義によって動員」されており「アイデンティティーの肯定」であるとして同調しない。「屏風」においては、アルジェリア人である主人公が革命の大義を裏切ることが祝福さ

れる。サイドによれば、この作品に限らず、ジュネの描く状況や人物たちは、「いかに緻密に描写され、いかに強烈な存在感を発散させていても、一時的で仮のものに思えてしまう」（同書、p.133）。つまりジュネは本来的に晩年性の資質をもった作家であり、特に後期の作品はそれが「きわめて明白」である。「政治的大義よりもはるかに重要なこと、はるかに美しく真実なこと、それは彼[ジュネ]の言い分によれば、政治的大義を裏切ること」（同書、p.133）なのである。

ジュネ自身、支持する対象に自らを同化する傾向をもたなかった。「ジュネは、アラブ人…に接近しようとしているくせに、…特別な立場（たとえば慈悲深い白人の父親的存在）に就こうという気など、さらさらならないように思われる一方で、現地人になろうとしているとも、つまり自分とは異なる者になろうとしているとも思われぬのだ」（同書、p.134）。母国にもアラブ世界にも自らを同化させようとしぬジュネは、アイデンティティーという概念自体に疑問を呈した。では、アイデンティティーを否定する世界観とはどのようなものだろうか。サイドは『晩年のスタイル』の第3章でモーツァルトのオペラ『コシ・ファン・トゥッテ』を分析しつつ、それを描き出している。

【3】-3 アイデンティティーなき世界 —— 『コシ・ファン・トゥッテ』

『コシ・ファン・トゥッテ』はちょうどベートーベンの「荘厳ミサ曲」のように、批評家たちを悩ませてきたモーツァルト晩年の作品である。「魔笛」をはじめとするそれまでのモーツァルトのオペラに見出せる「形而上的、社会的、文化的意義」を、このオペラは「歯牙にもかけていないように思われる」からである。具体的に言えば、登場人物たちはアイデンティティーの一貫性をほとんど保っていない。音楽は「極端にすばらしい」のに、それが「愚劣な物語、愚劣な人物たち…のために浪

費されている」とサイドは断じる。「『コシ』では、変装と、その変装
がもたらす心の動揺と迷いこそが正常であり、志操堅固や首尾一貫性は
ありえないこととして嘲笑される」（サイド、2007、p.101）のである。

サイドはミシェル・フーコーの表象論を援用しながら、この「ドタ
バタ劇」を分析してみせる。フーコーはサド侯爵に言及しつつ、欲望す
ら「用意周到に準備された表象の秩序」によって「隷属」という議
論を展開する。

「あらゆる表象は、欲望の生きた肉体の中でただちに生命を付与され
なければならないし、あらゆる欲望は表象的言説の純粋な光のなかで表
現されねばならない。ここから「場面」の厳密な連続が生まれる」（同
書、p.116；フーコー『言葉と物』からの引用）。

「表象の秩序」によって同じことの繰り返しが未来にわたって予想さ
れ、実際に再生産される。それが個人のアイデンティティー（一貫性）
を保証することにつながるわけだが、『コシ』においてはそれが取るに
足らぬものとされ、登場人物たちは一貫した意図や目的をもたず、どう
いう人間なのか捉えがたい。そのような人物像と物語の背後には「恐る
べき宇宙観」が垣間見られるとサイドは言う。それは、「いかなる救
済的枠組みもなく」、「流動性と不安定性が唯一の法則」であり、記憶は
たえず「消去」され、「死によってもたらされる最終的な休息」だけが
「唯一の帰結」となるような世界である。

「流動性と不安定性が唯一の法則」である世界に安定性をもたらすも
のが表象による秩序であり、それを参照することで各自が自己の中にア
イデンティティー（一貫性）を確立する。オペラの鑑賞者は、明確なア
イデンティティーをもつ登場人物と統合的な物語の筋を期待するゆえに、
『コシ・ファン・トゥッテ』のストーリーは（サイドが言うところの）
「心底とるに足らぬゲーム」「無神経で無内容な物語」だと感じてしまう。

「わたしたちが望んでいたのは、お伽噺的なめでたしめでたしの物語である。しかしモーツァルトは、あまりに誠実な (truthful) 芸術家なので、つぎのような事実を偽装できない。すなわち、すべての人物に等しく「罪がある」だけでなく、互いの罪に関する知を完璧に共有しているところで、すべてを癒す許しなど不可能であるということ。『コシ』において、なすべき最善のことは、人生という事実に対して、できるかぎり毅然たる態度で臨むことである」(同書, p.120; ドナルド・ミツチェルの論文からの引用)。

「互いの罪に関する知を完璧に共有している」とは、表象の秩序に皆が「隷属」していることを意味しているだろう。その逆に、繰り返しや再生産のきかない、いかなる解釈をも逃れてしまうものこそが、既存の表象の秩序に抗って人を動かす「力」をもつ。それはサイードの描く晩年の性質と共通する。では、そもそもサイードは表象をどのようなものと捉えるのだろうか。

【3】- 4 現実への実践としての表象 —— 『オリエンタリズム』から

ジュネについて論じた章でサイードは次のように述べる。「…アイデンティティとは、より強力な文化、より発達した社会が、暴力的にみずからを特定の民族に押し付けるときに利用する手法そのもの…である」(同書, p.141)。サイードの主著とされる『オリエンタリズム』(サイード, 1993)に拠りながら、このようなアイデンティティー論の背後にある彼の表象の考え方を見てみよう。

オリエンタリズムとは、西洋がつくりあげた東洋(オリエント)についての表象(学問的知識や思考様式)である。重要なのは、それは単に西洋と東洋が境を接していたことで自然に生まれたものではなく、西洋の「ヘゲモニー」(主導権)のもとでつくられた点である。つまりオリ

エンタリズムという表象は、表面的には、東洋という異文化の文化や社会、歴史などについての政治的にニュートラルな客観的知識のように見えるが、その根底に東洋を支配したいという欲求をもった、西洋の側からの「関心の網の目」(サイード, 1993, p.22)なのである。

オリエンタリズムが一定の関心を背後にもっているということは、それが単なる「神話」とか「作り話の寄せ集め」といった、実際のオリエントに照らして真偽を明らかにすることができる性質のものではないことを意味する。オリエンタリズムという表象は、現実のオリエントと「一体のものとしてつくり出された理論および実践」(同書, p.28)であり、オリエントという現実への見方、理解のしかた、かかわり方と結びついた、それ自体がリアリティーなのである。それはまた、対象に対してもつ西洋自身の関心や欲求が含まれている点で、西洋のアイデンティティーの一部をなす。したがってもしも東洋の人たちがこの表象体系を学び理解するとするなら、西洋のアイデンティティーを知らず知らずのうちに取り込み自らを同化することになる。「アイデンティティーとは、より強力な文化、より発達した社会が、暴力的にみずからを特定の民族に押し付けるときに利用する手法」だというのはそのような意味である。

サイードのこの議論から次のことが示唆される。一見すると特定の立場に偏らない中立的で客観的な表象も、現実への特定のかわり方を含意しており、その表象の秩序を受け入れることは現実への特定の行動パターンを再生産することにつながる。サイードが描く晩年のスタイル—エグザイルとしての晩年性とは、同時代の支配的な表象の秩序に同調することを拒み、安定したアイデンティティーの対極にあるカタストロフィへと向かい、それゆえの「力」をもつことなのである。

【4】生涯発達心理学にとっての意味

生涯発達心理学にとって晩年性の概念はどのような意味（implication）をもつだろうか。芸術批評を越えて、「晩年性を生きる」ことを心理学的にどのように捉えることができるだろうか。

私たちは人の一生がどのような段階を経て進んでいくのかを、さまざまな文化的所産——小説や映画などの、身近にある生涯発達の表象を参考にしながら成長し歳をとっていく。前節で述べたように、社会的に広く共有される表象は、人々の現実への関心のもち方やかわり方を左右する。ある生涯発達イメージをもつことは、それにもとづいた現実への関心のもち方——どのような歳のとり方が〈サクセス〉なのかを示唆し、発達制御の方向を示す。現在の発達研究は、老年期の発達の一般的イメージとして、生涯を完結した統合的なものとする表象を仮定しているといっただろう。発達研究が依拠するエリクソンの主著のひとつが『ライフサイクル、その完結』（The life cycle completed）というタイトルをもつことからわかるように。アイデンティティーに関して言うなら、老年期にさしかかると仕事の第一線を退いたり子どもが独立したり、あるいは大きな病気をしたりといった重要なライフイベントに遭遇し、アイデンティティーの再体制化を迫られる。人生の終盤という時期からいっても、自分の人生を総括し意味づけることを通して、老年者として成熟、円熟し老年者らしくなることが期待される。晩年性は、そのような老年期発達の表象を相対化する視点を提供する。

第1節で述べたように、生涯発達心理学は発達の不均質性に気づき、加齢を個別化の過程として捉えることを提案した。晩年性は、それと整合する考え方である。「晩年性のスタイル」を一般化するとしたら次のようになるだろう。老年を迎え個としての世界がはっきりしてくると、周囲の価値観や常識との間に距離を置きたくなる——言いかえると、「現在の中に

いながら現在から離れている」という傾向を（人により程度の差があるにせよ）もつようになる。既存の価値観としっかり折り合いをつけなくてもやっつけていける——人によっては、そういうものはいっそじゃまだという感覚をもつかもかもしれない。少なくとも晩年性の考え方からすれば、いわゆる成熟とか円熟とは異質な老年の境地を、アイデンティティーの再体制化の失敗とはみなさないだろう。

支配的枠組みに「回収」されないのは、よくも悪くも個としての強さのゆえであり、生涯発達としての個別化の果てのひとつの姿である。個としての強さとは、サイードのことばでいえば「葛藤を解消しない」（サイード、2007、p.254）力である。自分がどのような存在であるべきかを確認するための参照枠組みそのものに対して距離をとることが、人生の終盤戦の選択肢として——「統合」の失敗としてではなく——認められてしかるべきだろう。晩年性は、既存の老年期の発達イメージに「回収」されない生き方の存在意義に光をあてると思われる。

〔注〕「エグザイル」をはじめとして、「和解を拒む」、「救済的イメージの拒否」、あるいは「生き延びる」、「餓いならされない」といった表現は、『晩年のスタイル』にしばしば登場するサイード独特の言いまわしである。パレスチナに生まれ、同胞の多くが故郷を追われ難民となった時期に、エジプト、アメリカと移り住んだサイードは、パレスチナのおかれた政治的状況につねにコミットしており、芸術についての議論もそれらとつながったところで展開される。サイードその人がエグザイルなのである。

文献

アドルノ、T.W. 1997 ベートーベン——音楽の哲学．大久保健治訳．作品社。
（原著は Adorno, T.W. 1993 *Beethoven: Philosophie der Musik*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.）

- 浅野憲一・小玉正博 2007 わりきり志向尺度作成の試み. 日本健康心理学会第20回大会発表論文集, p.76.
- 浅野憲一・小玉正博 2008 わりきり志向が目標への関与に及ぼす影響. 日本心理学会第72回大会発表論文集, p.1017.
- Carstensen, L. L., Isaacowits, D. M., & Charles, S. T. 1999 Taking time seriously: A theory of socioemotional selectivity. *American Psychologist*, **54**, 165–181.
- Feifel, H. & Stack, S. 1989 Coping with conflict situations: Middle-aged and elderly men. *Psychology and Aging*, **4**, 26–33.
- Freund, A. M., & Baltes, P. B. 1998 Selection, optimization, and compensation as strategies of life-management: Correlations with subjective indicators of successful aging. *Psychology and Aging*, **13**, 531–543.
- 飯牟礼悦子 2007 慢性疾患をもつことによるポジティブな心理的発達——1型糖尿病という経験がもたらすWisdomの検討. 博士論文(白百合女子大学). 未公開.
- 城福雅伸 2002 明解【仏教】入門. 春秋社.
- 柏木恵子 2005 発達とは? 獲得と消失のダイナミックスそして質も量も変化する. 柏木恵子・宮下孝広・古澤頼雄(著), 発達心理学への招待——人間発達をひも解く30の扉(18–28). ミネルヴァ書房.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎康子・坂野雄二 1995 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度(TAC-24)の作成. 教育相談研究, **33**, 41–47.
- Maddox, G. L. 1987 Aging differently. *The Gerontologist*, **27**, 557–564.
- 松村明(監修) 1998 大辞泉 増補・新装版 小学館.
- 松村明(編) 2002 大辞林 第二版(新装版) 三省堂.
- 三枝充恵 1990 仏教入門. 岩波書店.
- サイード, E. W. 1993 オリエンタリズム. 今沢紀子訳. 平凡社. (原著は Said, E. W. 1978 *Orientalism*. New York: Pantheon Books.)
- サイード, E. W. 2007 晩年のスタイル. 大橋洋一訳. 岩波書店. (原著は Said, E. W. 2006 *On late style: Music and literature against the grain*. New York: Pantheon Books.)

Seligman, M. E. P., & Maier, S. F. 1967 Failure to escape traumatic shock. *Journal of Experimental Psychology*, 74, 1-9.

新村出（編） 2008 広辞苑 第六版 岩波書店.

鈴木忠 2008 生涯発達のダイナミクス——知の多様性 生きかたの可塑性. 東京大学出版会.